



## インフォメーション

### 日本蜘蛛学会第31回大会 (広島市)のお知らせ

本年度の日本蜘蛛学会大会・総会は、広島市の(財)広島県環境保健協会で開催されることになりました。詳しくは大会案内をご覧のうえ、多数ご参加ください。

#### 1. 日程

1999年8月21日(土)～8月22日(日)

21日	10:00 - 12:00	一般講演
	13:00 - 14:00	総会
	14:00 - 17:00	シンポジウム
	18:00 - 20:00	懇親会
22日	9:00 - 12:00	一般講演
	13:00 - 15:00	ポスター発表

#### 2. 会場

(財)広島県環境保健協会  
730-8631 広島県広島市中区広瀬北町9-1  
(井原 庸)



## 同好会情報

日本には日本蜘蛛学会だけでなく、各地に同好会がある。ここでは、そこで行なわれる採集

会や講演会、そこで発行される定期刊行物などの活動内容を紹介する。興味を持たれた方はぜひ入会して、行事などに参加されてはいかがでしょうか。

三重クモ談話会(本部:太田定浩)

会報「しのびぐも」を年1回発行。採集会・合宿・例会などを年数回実施。

今年度の採集観察会は、久居市雲出川流域で実施。

1999年 5月30日(日)  
9月26日(日)  
12月5日(日)

近鉄久居駅西口前、午前9時40分集合。大雨以外は決行。参加希望者は事務局まで連絡のこと。

合宿(中部蜘蛛懇談会と合同)  
1999年8月7日(土)～8月8日(日)  
三重県熊野市一帯で実施。雨天決行。  
集合:JR紀勢本線熊野市駅12時50分  
宿泊場所 旅館「徐福荘」費用7000円  
詳細は、事務局まで。

総会兼学習会、懇親会は、2000年2月26日(土)～27日(日)に予定。

しのびぐも 26号(1998.12.31発行)  
小笠原幸恵:子育て行動が見られたヒシガタヒメグモとシモフリヒメグモ

福島彬人：蜘蛛三題

三重クモ談話会：四日市のセアカゴケグモの野外調査を終えて

橋本理市：冬季休閑田のクモ

緒方清人：ロクシャヤミサラグモの新産地について

新海 明：セアカゴケグモの網構造

須賀瑛文：太田定浩氏の「多度のクモ類」に追加するクモ

須賀瑛文：三重県のイシサワオニグモの新産地

三重クモ談話会：三重県産真正蜘蛛目録（ ）

三重クモ談話会採集観察会報告

入会申し込み

〒515-0044 三重県松阪市久保町 1843-157

貝發憲治（事務局）

会費 年 1500 円

和歌山クモの会（会長：米田 宏）

会報「和歌山クモの会会報」を年 1 回発行．

総会・観察会を年 1 回開催．

今年度の採集観察会及び総会は、1999 年 7 月 25 日（日）高野山で実施の予定．

和歌山クモの会会報 No. 8（1998.7.8 発行）

内容は、遊絲 3 号を参照して下さい．

入会申し込み

〒642-0002 海南市日方 1156 東條 清

（事務局）

会費：年 500 円

東京蜘蛛談話会（会長：萱嶋 泉）

会報「KISHIDAIA」を年 2 回、「談話会通信」

を年 3 回発行．採集会年 4 回・合宿年 1 回・総会例会などを年 2 回実施．

今年度の採集会は、山梨県大月市扇山周辺

1999 年 5 月 16 日（日）

7 月 11 日（日）

10 月 17 日（日）

2000 年 2 月 20 日（日）

集合：JR 中央本線「鳥沢駅」改札口午前 11 時

合宿は福井県敦賀市周辺 中池見湿地などを予定．

1999 年 7 月 24 日（土）～26 日（月）

集合：宿舎「伝平荘」午後 6 時ころ迄

敦賀市縄間（のうま）29-14-2

費用：8000 円 1 泊 3 食．

詳細は、新海 明まで．

合同例会は 1999 年 12 月 5 日（日）. 国分寺市商工会館 午前 10 時より．

KISHIDAIA 76 号 発行 30 周年記念号

（1999.3.1 発行）



小澤實樹：表紙に寄せて  
萱嶋 泉：東京蜘蛛談話会発足前後の事情  
大河内哲二：「KISHIDAIA」発刊の頃の思い出  
松本誠治：談話会通信発刊の頃の思い出  
新海栄一：昭和43年12月21日(KISHIDAIA  
発行を決定した日)  
小野展嗣：いつかどこかで(4)編集, 編集,  
また編集  
新海 明：東京蜘蛛談話会の活動記録(1966~  
1999)  
泉 宏子：オオクマヒメドヨウグモの生態観察  
加藤むつみ：トゲグモの卵のうと越冬  
坂倉泰弘：苦節9年, ハヤテグモの生息環境と  
婚姻給餌の発見まで  
船曳和代：クモの網の展示標本の作り方  
徳本 洋：八丈島のジョロウグモ消滅か?  
宮下和喜：ハナグモの生活史  
DRAGLINES  
八幡明彦：コシロカネグモのクモ食い  
平松毅久：キンヨウグモの擬死  
平松毅久：オウギグモの求愛行動  
伴 満・大川秀治：神奈川県津久井郡城山町の  
クモ  
池田博明・伴 満：夏の神津島のクモ  
池田博明：「神奈川県産クモ類目録」追記  
谷川明男・佐々木健志：沖縄県産クモ類目録

入会申し込み

〒350-0816 川越市上戸91-3 瀬尾荘202

平松毅久(事務局)

Tel 0492-33-8792

会費:年2800円(2000年度から3800円)(学  
生2000円)

関西クモ研究会(会長:山野忠清)

会報「くものいと」を年2回発行. 採集会・

研究会例会などを年数回実施.

今年度の採集会は, 1999年9月19日(日)  
に兵庫県姫路市 姫路科学館周辺

集合:午前11時 姫路科学館玄関前

合宿は, 6月または7月に2泊3日で実施の  
方向で検討中.

例会は, 1999年12月12日(日)に大阪市  
の四天王寺高校で実施.

くものいと25号(1999.1.10発行)

榎元敏也:「蜘蛛の切手」紹介

西川喜朗:吉住氏採集の大阪府枚方市のクモ

長谷川夕希子:「タランチュラの飼育」

船曳和代:姫路市青山でマメイタイセキグモと

カトウツケオグモを採集

関西クモ研究会採集会報告

牧野達也:蜘蛛礁計画

関西クモ研究会例会の記録

細田みどり:プレシンプと私

新海 明:広島県福山市と尾道市のクモ

渡部 健:ウズグモ研究事始め

入会申し込み

〒567-8502 茨木市西安威2-1-15

追手門学院大学生物学研究室内

関西クモ研究会

Tel 072-641-9555(西川研)

072-641-9550(加村研)

Fax 072-643-9432

会費:年1000円

中部蜘蛛懇談会(代表:村上 勝)

会報「蜘蛛」を年1回,「まどい」を年3回発  
行. 採集観察会・例会を年数回実施.

今年度の採集観察会は、1999年5月23日  
(日)岡崎市矢作川河川敷

集合：JR東海道線岡崎駅改札口午前10時  
雨天決行

1999年9月5日(日)岐阜県御嵩町水源の森  
集合：名鉄広見線御嵩駅前午前10時ころ

雨天決行  
参加者は必ず担当者(柴田)か事務局まで連絡  
下さい。

1999年11月7日(日)岐阜県瑞浪市釜戸  
集合：JR中央線釜戸駅午前10時ころ  
雨天決行

合宿(三重クモ談話会と合同)1999年8月7  
日(土)~8月8日(日).三重県熊野市一帯で  
実施.雨天決行.

集合：JR紀勢本線熊野市駅12時50分  
宿泊場所：旅館「徐福荘」費用7000円  
詳細は、三重クモ談話会員発さん(0598-29-  
6427)まで。

総会・研究会は、2000年2月11日(金)に  
予定。

蜘蛛(KUMO)31号(1999.2.11発行)  
宮下和喜：ドヨウオニグモの生活史  
板倉泰弘：アライトコモリグモの幼体の成長と  
卵嚢産出

板倉泰弘：アライトコモリグモの求愛行動  
松田まゆみ：風穴に生きるクモ  
徳本 洋：金沢市付近および秋田市付近のジョ  
ロウグモ分布

福島彬人：雄物川河川敷の蜘蛛  
益田和昌：岐阜県美山町の倍足類  
板倉泰弘：天龍川中下流部河川敷の真正クモ類

2

緒方清人：富山村の真正クモ類  
須賀瑛文：我が家に棲み付いた新顔のクモ6種

## の紹介

太田定浩：「匹」か「頭」か、「幼生」か「幼体」  
か

短報

新海 明：雪上のクモたち(薄葉重氏の採集品  
より)

須賀瑛文：クロガケジグモは豚舎・鶏舎・肥  
料工場に多い

須賀瑛文：クロスジオチバカニグモを松阪市  
で採集

板倉泰弘：ハヤテグモの婚姻給餌行動を発見

## 入会申し込み

〒444-0076 岡崎市井田町字荒居 47-6

板倉泰弘 (事務局)

Tel 0564-28-5857 (1999.3より変更)

会費：正会員年2500円(高校生以下1000円)  
準会員「まどい」のみ500円

## 関西クモゼミ

毎月1回、第3か第4の日曜日に滋賀県草津  
市の立命館大学で開催。

会費などなく誰でも参加できる。

連絡先 立命館大学理工学部生物地球科学研  
吉田 真 TEL 077-561-2660

## 東京クモゼミ

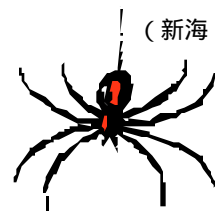
毎月1回、第1日曜日に東京大学農学部の宮  
下研または神奈川県立七里ガ浜高校で開催

会費などなく誰でも参加できる。

東京クモゼミ報告(プリント)を配布。

連絡先 新海 明 TEL 0425-22-2605

(新海 明)



# 言いたい！聞きたい！



## 蜘蛛の採集道具紹介（１）

### 大熊先生の吸虫管

梶元敏也・梶元智子

採集・観察会に参加するときは、読者のみなさんはどのような道具をもっていくのであろうか。クモの採集といえばアルコール瓶と吸虫管は誰もが持っている必須アイテムである。アルコールピンは特にどんなものであろうと採集の効率には影響しないだろうが、吸虫管は違う。吸虫管の善し悪しはクモ採集の効率を左右するのである。

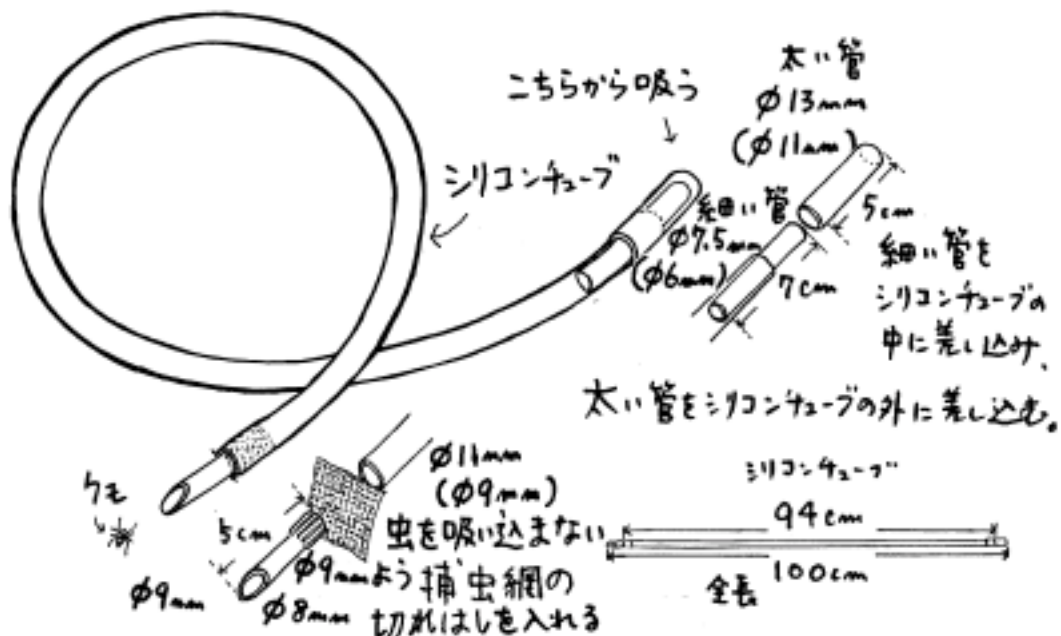
ところで、多くの人が持っている吸虫管はゴムあるいはシリコンのチューブの途中にガラス

製の瓶がついているものだ。これらは昆虫採集道具として市販されている。実はこのガラスでできた部分が問題なのである。クモの採集は車で近くまで行って車道に沿って行うことが多いところが、車道というのはたいていが舗装されているので、誤って吸虫管を落として、ガラス部分を割ってしまうことがある。こういう経験をされた方も多いのではないだろうか。採集中にガラスが壊れると本当に困るのである。

しかも市販の吸虫管は吸ったクモや昆虫をいったん途中のガラス瓶に落とすようになっている。このため吸ったクモや昆虫はガラス瓶のふたをはずしてアルコール瓶に入れなければならない。これも両手を使わなければならない結構面倒な作業なのである。この吸虫管のデメリットを克服したのが大熊先生の吸虫管なのである。

1992年の3月に、一昨年急遽された大熊先生にマレーシアでのクモ採集に同行していただいた際、先生から吸虫管をいただいた。この吸

## ～大熊式吸虫管～



虫管は、誰が考案したのかはわからない。ひょっとしたら九大農学部 昆虫学教室のオリジナルかもしれない。しかし、これまでいくつかのクモ採集会に参加したが、こんな吸虫管は見えない。

#### 大熊先生の吸虫管について

この大熊先生の吸虫管はとにかく丈夫である、小さなクモでも決して逃がすことはない。そして何よりも軽いという吸虫管に要求されているすべての点をクリアしている逸品である。しかも材料の値段も安く、誰にでも作れるという本当にすばらしいものである。

#### 作り方

材料（シリコンのチューブ、プラスチック製の筒、捕虫網の切れはし）

シリコンチューブを図のような長さに切る。プラスチック製の筒も図のような長さに切断する。これらをシリコンチューブに差し込むだけである。クモを吸う吸い口の部分には捕虫網の切れはしをはさんでおく。こうすることで、吸った獲物はこの部分でとまる。

#### 使い方

チューブは細長いので、中央部分にひもをつけて、そのひもを首にかけておく。場合によってはこのチューブを首に巻いてもいい。実際にクモを見つけたら、一方を口に含んで吸引する。クモは捕虫網の切れはしをはさんだ部分で止まる。今度はアルコール瓶の中に吹き出せばいいのである。

現代の自然科学の研究には「哲学する力」「論理的に推理する力」そして「ハイテクを駆使する力」の3つの力が必要である、と私は考えている。クモの生態や進化あるいは多様性の研究

についても同様である。ただし、最後のハイテクというのは必ずしも高額な精密機器だけを指すのではない。むしろ使い勝手の良い道具もまたハイテクの一種なのである。いい道具というのは多くの人を使うべきで、そのことによってクモの採集効率があがり、よりいっそう調査、研究が進展する可能性があるのである。

次回に続け、という願いを込めて、タイトルには番号をつけてしまった。自分の使っている道具（例えばトラップなど）はとても優れた逸品であるという方がいたら、是非紹介していただきたい。

#### 西表島クモ談話会奇行（2）

平松毅久

「ガチャリ」100円硬貨が落ちる音で目が覚める。日付は8月14日になっているが外は暗くまだ宵の口である。ウトウトし始めたと思う間もなく蒸し暑さのあまりまた目が覚めた。クーラーが切れたらしい。実はこの民宿のクーラーはコイン投下式で1時間100円なのだが1度に400円分しか入れることができない。谷川氏から事前に聞いていたので100円玉をかき集めて来たのだが、「クーラーなしでは暑くて寝られない」という言葉には「寝入ってしまえば勝ち」とたかをくくっていた。ところがその考えが甘い事にすぐ気付いた。やむなく100円玉を入れてもう1度寝入り、次に目覚めたときには太陽が既に昇っていた。

この日は民宿の中学2年の息子さんが夏休みの自由研究のテーマにクモを選び、友達と2人で西表クモ談話会の臨時メンバーとして同行することになり指導教官の谷川氏も朝から張り切

っていた。筆者も別の意味で張り切っていた。前々から見たかったあこがれのクモに会えるかもしれないからだ。そのクモは洞窟に隠れ住む奥ゆかしい性格？で谷川氏が採集されたという洞窟がある大富というところへ午前中行くことになっていた。4人はレンタカーで出発、本洞は入洞禁止になっているので支洞に入るようになった。入り口が分からず少し迷ったがようやく畑を横切って入る道を発見、炎天下の空き地に車を止め洞くつを目指した。畑を抜け木立ちに入ると少しひんやりしていい気持ちだった。オオジョロウグモが網を張っておりミナミノアカイソウロウグモやハナナガイソウロウグモが同居していた。前者は前年の沖縄合宿でも見たが後者は初めて見るクモで琥珀色の体色が美しい。谷川氏は子供たちにクモの解説を始めた。オオジョロウグモの体の大きさに気持ち悪がる様子が笑えた。林を抜けて草原に出るとクズの葉にキヌアミグモがいて本州におけるクサグモのニッチをキヌアミが占めている感があった。ちなみに谷川氏によれば西表島にはクサグモは非常に少ないという。肝心の洞窟は草ぼうぼうで入口がわからず次の日別の洞窟へ回ることになった。車へ戻る途中カラオビハエトリという頭胸部が黄緑で腹部に赤と空色と黒の帯がある美麗種（クモ基本 50, 118 p 参照）を見付け子供たちも歓声を上げた。いつも思うことだが液浸にすると退色するのが残念だ。

昼食後最初に行った大富の亜熱帯観察路はいわば自然遊歩道のような感じなのだが、予想通り我々以外に人はいなかった。炎天下の砂利道を歩くこと約 15 分で薄暗い林内に入った時はほっとした。キノボリトカゲやサキシマカナヘビが出迎える？中を林の奥へと進む。まず驚いたのがヒメユウレイグモの多さで葉の裏を見れば大抵いた。半透明の淡黄色で一見 *Chryso* 風

だが西表一の普通種との声もある。このクモについては後述するが実は新海 明氏のあこがれのクモである。岩の根元にいたミナミユウレイグモの網にハナナガイソウロウグモが寄生していたのは驚きでホストの種類が結構バラエティーに富んでいるようだ。

谷川氏は午前中からオオジョロウの網に餌を引っ掛けクモによって攻撃方法が異なることを子供たちに説明していたが、バイト（噛み付き）先行であるオオジョロウと対比させるモデルとしてラップ先行のナガマルコガネグモを探していた。ところがついに見付からず古見というところへ移動することになった。

雑木林に入るとアオキ？の葉上に通称『緑のハグモ』がいた。名護城跡でも見たが、緑と言ってもこれも未記載種である『赤いハグモ』と区別するため（別に某即席麵のCMではない）の呼び名で実際は『とろろこんぶ』のようなくすんだ色をしている。体型がネコハグモのようにならずぐりしておらずスマートで、分類素人の私見で恐縮だが *Dictyna* 属ではないような気がする。牧場に隣接した林の切れ目の小道に探し続けたナガマルコガネグモがいた。幼体でやや小型だったがカメムシをかけるとまずラップし



ナガマルコガネグモ（写真：谷川明男）

谷川氏の説明通りの結果に子供達も感心していた。また小型の餌にはバイト先行と攻撃パターンが変化することを目の当たりにして興味深げであった。子供はやはり本質的には生物が好きでとくにその行動に興味を示すようだ。野外観察等で子供達にクモのことをもっと知ってもらふ必要性を痛感した一日であった。

夕刻新海氏を港に出迎えに行く。強行軍でさすがに疲労の色も見えたが、夕食後は西表クモ談話会夜の部開始である。まずはやもめ3人のろまんちっくな星空観察の後、クーラ川河口の谷川氏いわく『ゲホウグモ海岸』へと向かう。うじゃうじゃというほどではないが確かにゲホウが多い。海岸のアコウの木に造網していたが網目が細かくとくにヨコ糸は新海氏の計測によれば130もあり、かつてレコード盤のようなと評されたのもうなずけた。宿へ戻り軽くビールで一杯の後、翌日の成果を祈りまだ見ぬクモに思いを馳せながら就寝。

### 蜘蛛の旗手

斎藤慎一郎

「雲の旗手(クモのはたて)」という古語がある。空にたなびく雲を、風を受けた旗にたとえたものだが、雲を同音異義語の蜘蛛に読み変えて、「クモの旗手」という表現が生まれた。小学館『日本国語大辞典』に、「死んだ蜘蛛の手が風で動くさま」「また蜘蛛の巣によそえてもいう」と説明されている。だがクモは死ねば歩脚を縮めてしまうから、記述の前半部はじっさいにはありそうもない。これはよろしく「クモの脱皮殻が風に揺れるさま」とすべきだろう。クモは糸を足がかりにして脱皮する。脱皮殻はしばしば糸で他物に付着して残り、その脚の部分が風に

そよぐ様子は、野外で案外目につくものだ。昔の風流人がこれを見逃さなかったことはうれしい限り。三十六歌仙の一人、源雲重之の歌「さがにのくもの旗手の動かかな風をいのちにおもふなるべし」は、こう解釈してこそ「風をいのちに」が生きてくる。アシダカクモやイオウイロハシリグモなど大型のクモの抜け殻も美しいが、もっとはるかに小さなクモの脱皮殻も、古くから気づかれることは思いのほか多かったのであるまいか。身近かな自然界の、かるやかで特異な美。今年はクモノハタテをいくつ見られるか。クモノハタテから、それを着ていた主のクモ類推するゲームは洒落ているが、ぼくにはとても歯が立たなそうだ。

### 漁網とクモの網

斎藤慎一郎

西暦15世紀、琉球の勝連にアマワリ(阿麻和利、または阿摩和利)という人があった。一説ではアマワリは「のろ」の子で、洞窟に捨てられ、からだが弱かった。あるときクモが網を張るのを見て、投網を発明し、民衆に与えた。鉄の鎌も、楽器の三線もアマワリの考案だ、と語ってくれたのは、1998年12月10日、勝連城跡で出会った伊江島出身の初老の紳士であった。アマワリは庶民に敬われ、暴君の茂知附按司をたおして勝連城主となった。しかしその後攻略により殺されて、彼は琉球王国の統一政権を掌握できなかった。沖縄県勝連町の人々は、アマワリを今でも愛している。

アマワリ説話は『かっちゃんカナー』という絵本になって、勝連町ではすべての小学生に読まれている。「かっちゃん」は勝連、「カナー」はアマワリの呼び名である。この絵本は怠け者のカ



ナーがクモの巣作りを見て発奮し、漁網を考案したと物語る。幼少のころ体が立たず、クモの巣作りを見てから立ち上がり、魚をとる網を創始したとする伝承もある。勝連町でだれもが知るアマワリ伝説も、クモ学界ではまだ語られていないだろうか。

参考文献：津波敏子文／仲地のぶひで絵『かつんカナー』1985年初版／沖縄時事出版  
遠藤庄治編『かつれんの民話 本島篇』1991年／勝連町教育委員会

幻のクモ学者安念嘉一先生

工藤泰恵

昭和10年代に、クモに関して2~3の記録を残している安念嘉一先生の教え子だった、という人に偶然に出会ったので、一つの情報として報告させていただきます。

その人は、千葉県我孫子市在住の荒井盛美さん(67歳)で、荒井さんが中学生の頃に学んでいた富山県立砥波中学校(現在の県立砥波高等学校 富山県砥波郡鷹巣村在)で生物を教えていらしたのが、安念先生。荒井さんは約一年半在籍して、その間に安念先生から生物を教わり、その中でクモの話をよく聞いたので覚えていた、ということです。残念ながら荒井さんは、



途中で転校したため、その後の安念先生の話は知らないとのことですが、「多分、定年までその学校にいたのではないかと……!?」と語っています。

ちなみに、安念先生のクモの記録は、Acta arachnologicaのVo1. V, No.2(1910年7月発行)に「富山縣産蜘蛛類目録」として94種、同じくActa arachnologicaのVol. VI, No.3(1941年9月発行)に「蜘蛛3種の採集記録」として3種類のクモ(アンネムナアカグモ, スソグロムナアカグモ, オビボソカニグモ)が、それぞれ図入りで紹介されています。

なお、この出会いに関し、報文にしておくように勤めて下さった小野展嗣博士、根ほり葉ほりのインタビューにも終始笑顔で答えて下さった荒井盛美さん、少ない情報にも関わらず立派な絵を描いて下さった加藤むつみさんに、紙面をお借りして心からの謝意を表します。

塩原湖成層から見つかったクモの化石

谷川明男

1998年11月下旬に神奈川県立藤沢高等学校の美ノ谷憲久先生から電話をいただいた。“化石を探せ”と題して行っている生徒実験で、クモの化石が見つかったという内容であった。さっそく見せていただいたのだが、その保存状態のよさにびっくりした。ピノキュラーで拡大すると歩脚の毛まで確認することができるのだ。岩石は塩原湖成層の凝灰質頁岩で、新生代第四紀更新世のものだということだ。

さてそのクモは図に示したものであるが、カニグモ科のクモであることは間違いない。触肢の先端ははっきりとふくらんでおり、雄であることがわかる。残念ながら成体なのか否かは判



塩原湖成層から見つかったクモの化石

断できない。属、種については確実なことはいえないが、せっかくだから大胆な推論をしてみよう。頭胸部の丸っこさ、腹部の形と頭胸部とのプロポーシオン、肢の長さとの大きさとのプロポーシオンあたりから、私はこのクモはエビスグモ属のクモではないかと思うのだがいかがであろう。この当時の塩原は現在と同じか少し寒かったということであるから、アマギエビスグモかタカネエビスグモではないだろうか。



カトウツケオグモ「カトちゃん」

飼育日数 49日間

南部敏明

#### 運命の出会い

1998年9月25日、埼玉県児玉郡神泉村矢納城峯神社に、埼玉県のレッドデータブックで絶滅危惧種になっている蜂の調査に行った。昼近く帰ろうと思ったが手作りパンのトーストという看板にひかれて山小屋風の喫茶店に入った。

何回も調査に来ているのだが初めてである。手作りのママレードにも満足して、帰ろうか、ついでに城峯公園を一回りしてみるか迷った末、公園に向かって歩きはじめたのがカトちゃんとの運命の出会いとなった。

公園の入口を少し入った、桜の木の下、山つつじの鉛筆ほどの枝に止まっている、カトちゃんを見た瞬間、電気が走ったような衝撃を受けたのは前の2対の脚を思い切り広げた異様な形のせいだったろうか。1度見たいとおもっていたクモの1つであることはすぐわかった。その脚を広げた形を写そうと、カメラを構えたまではよかったが、接写しようとする欲を出して近づいたら、警戒したのか脚を縮めてしまった。何枚か写し、生きたまま連れ帰ろうと、フィルムケースを出し、ピンセットを突き刺して空気穴をあけている間そのままの姿勢でじっとしていた。家に帰って、たしか大野正男先生のまとめたものがあつたはずと思い、捜し出して読んでみると、埼玉県では2カ所目で北限の記録になることがわかった。生態的にはまだあまりわかっていないようなので飼育してみることにした。

#### クモの飼育は初めてだ

クモを飼ったことはないし、どういう点に観察の重点をおけばいいかわからない。わからないことは人に聞くのが一番だ、ということで、平松毅久氏に手紙を出して教えを請うた。親切な返事を頂き、いよいよ飼育に挑戦することにした。最初は小型のプラスチックの水槽(蓋は網目状)を使ったが、蓋にくっついてることが多く、外から見えないので、途中から径9、高さ9cmの腰高シャーレに変えた。下に鹿沼土を1cmほど入れて水を含ませ、足場として椿の葉を3枚入れる。水が必要とのことなので、綿棒の綿に水を含ませて入れておいたがそれを

なめるようなところは1度も見られなかった。餌は最初は手じかにいたミスジミバエをやったが、ヒラタアブ、キンバエなどもよく捕らえた。歩くときは常に糸を引いているということさえ知らなかったが、この狭い瓶の中は自然に糸が張り巡らされる結果となった。しかしその糸にハエが絡まってもそれによって捕まえることはなかった。

夜から翌日の午前中は1カ所にじっと動かず、午後あるいは夕方の一瞬活発に動く。

カトちゃんの好物はヒラタアブ？

クモは咀嚼型の口を持っていて、獲物を噛み潰すと思っていたら、全く噛むことはなく、牙で刺すだけだった。牙が吸入ポンプにはなっていないと思うので、滲み出た体液を吸うのだろうか。吸い終わって落としたアブをみると、ぺしゃんこになっていて、内部は空になっている。牙を刺した穴が胸部、腹部、複眼に、1例をあげると2、5、3個あいている。捕まえてから放すまでの時間は、2～3時間、時にはもっと長い。捕まえて牙を刺した後しばらくアブはもがいているが動かなくなるのは毒を注入したのだろうか。そのままずっと全く動かないが、放す少し前になると、アブをくるくる回し、牙を刺す位置を変える。たいてい1度は腹部の先端をくわえる。いかにも吸収しつくしてやろうといった感じである。

獲物を採る瞬間はなかなか見られなかった。



カトウツケオグモ  
フィールド凶鑑クモより

アブを入れて2分後に見るともう捕まえていたり、2日間捕まえなかったり、腹のすき具合によるのだろうか。ヒラタアブが瓶の中でホバリングをすると、脚を広げ、アブの飛び方に頭を向け定位する。脚は第1、2脚の腿節を後ろ向きになるくらい体にぴったり付け、膝節から先を体に直角になる位横に広げる。獲物に飛び掛かるところは1度も見られなかった。目の前にくるか、口の付近に触れた時、瞬間的にその脚で抱え込んで捕らえるようである。見たのはアブがガラス壁で跳ね返って偶然口の所にぶつかったのを捕らえた1回のみである。

アブがガラス壁で跳ね返って偶然口の所にぶつかったのを捕らえた1回のみである。

#### 越冬するか

だんだん寒くなるのでどうやって冬を迎えたらいいかが次の悩みの種になった。釣道具屋で聞いてみると、冬でもサシは売っているという。餌は何かなりそうなので、後は温度である。学校で恒温器を借りようかと思った

が、退職した身では無理も言えない。鉢植え用の小形ビニール棚に使うサーモスタットとひよこ電球で作ってやろうと、日曜大工はお手の物なので、5面は2重板(間に空気層)、全面のみ2重硝子の箱を作った。これは最高最低温度計を入れておいたところ、17.5～24.5を保てることがわかった。中に腰高シャーレを入れたのでその内部はもう少し温度差が小さいかもしれない。

このクモが捕食のためにシート網を張るかどうが大野先生の総説に疑問が出されていたので

注意してみたが、どうもそういうことはなさそうだった。ただガラス面あるいは椿の葉の表面の1カ所に糸を何回も張り渡し、その上に止まって夜眠っていることがよくあった。これがシート網のように見えなくもない。最初の頃はこの糸をよく張ったが、しだいに張らなくなったのはなぜだろう。

#### とらぬタヌキの

なんだか腹部が大きくなってきたようなので、まだ誰も見ていない産卵、卵嚢、卵の数などへの期待が高まる一方だった。飢餓よりも食べ過ぎの方がよくない、とは聞いていたが、強制的に食べさせようとハエを差し出しても逃げてしまっても採ろうとしないし、自分で捕まえる分には食べ過ぎることはないだろうと、餌はほとんど切らさず入れておいたのがいけなかったのだろうか。11月12日夜少し元気がないかなと思ったら、13日の朝死んでいた。あと1日で50日になるところだった。何だか力が抜けてしまった。死体をいろいろな角度から写真をうつした。ところが中間リングの扱いを間違えて全く写っていないかった。さて、これだけのわずかの観察の中に新知見はあるだろうか。

### 採集情報

日本各地で採集された、稀産種や分布上の重要種などについての情報を掲載する。これを読み、「私もこんな種類を採集しているぞ」という方はその情報を是非お寄せいただきたい。今回は、その後に寄せられた1998年の採集情報の続報を掲載する。

#### マメイタイセキグモ

神奈川県城山町 1998年6月11日 亜成体1  
大川秀治

同上 1998年7月 成体? 1  
大川秀治

#### ムツトゲイセキグモ

神奈川県城山町 1998年7月12日 成体1  
大川秀治

岐阜県山県郡美山町 1998年7月19~20日  
成体各1, 幼体1

中部蜘蛛懇談会・三重クモ談話会合宿参加者  
兵庫県姫路市姫路科学館 1998年9月5日 成体1  
船曳和代

#### カトウツケオグモ

兵庫県姫路市姫路科学館 1998年9月5日 成体1  
船曳和代



アシナガカニグモ

フィールド図鑑クモより

#### アシナガカニグモ

神奈川県城山町 1998年6月11日 成体  
大川秀治

同上 7月15日 成体大川秀治

#### オオクマヒメドヨウグモ

愛知県富山村 1998年5月4~5日 幼体各1  
緒方清人

(新海 明)



### 最近気がついた分類関係の文献

最近発表された日本のクモの分類に関連のある論文をいくつか簡単に紹介する。

: Irie, T., 1998. A new eyeless spider of the genus *Cybaeus* (Araneae: Cybaeidae) found in a limestone cave of Kyushu, Japan. *Acta arachnol.*, **47**:97-100.

*Cybaeus tsukiensis* Irie 1998 イツキメナシナミハグモを新種として記載。

: Tanaka, H., 1998. A new species of the genus *Pardosa* (Araneae: Lycosidae) from Japan. *Acta arachnol.*, **47**:101-103.

*Pardosa nojimai* Tanaka 1998 カコウコモリグモを新種として記載。

: Yoshida, H., 1998. A new species of the genus *Chryso* (Araneae: Theridiidae) from Japan. *Acta arachnol.*, **47**:105-107.

*Chryso bimaculata* Yoshida 1998 フタホシヒメグモを新種として記載。

: Yoshida, H., 1998. A new species of the genus *Ctenus* (Araneae: Ctenidae) from the Yaeyama Islands, Japan and Taiwan. *Acta arachnol.*, **47**:117-120.

*Ctenus yaeyamensis* Yoshida 1998 ヤエヤマシボグモを新種として記載。*Ctenus* ミナミシボグモ属は日本新記録。

: Tanikawa, A., 1998. A revision of the Japanese spiders of the genus *Neoscona* (Araneae: Araneidae). *Acta arachnol.*, **47**:113-168.

*Neoscona minoriscylla* Yin et al. 1990 ヤスダオニグモを日本新記録として報告。*Neoscona amamiensis* Tanikawa 1998 アマミオニグモを新種として記載。*Afraranea* 属を *Neoscona* 属のシノニムとする説を支持し、コゲチャオニグモとアカアシオニグモを *Neoscona* 属のもとに再記載。ホシスジオニグモ、ドヨウオニグモ、イエオニグモ、ヘリジロオニグモ、ワキグロサツマノミダマシ、サツマノミダマシ、ヤマシロオニグモを再記載。

: Kamura, T., 1998. Taxonomic notes on Gnaphosidae (Araneae) from Japan. *Acta arachnol.*, **47**:169-171.

ホシジロトンビグモを *Sergiulus* ブチトンビグモ属に転属。*Drassodes pater* Bösenberg & Strand, 1906 と *Drassodes rotundifoveatus* Bösenberg & Strand 1906 ハイバラワシグモを *Urozelotes rusticus* (L.Koch 1872) カバキケムリグモの新参シノニムとした。

(谷川明男)



### ギャラリー



カラカラグモの一種

正確な種名はわからないが、メキシコのパレンケにあるマヤ文明の遺跡で見つけた。呼び糸にならべた卵のうがおもしろい。(谷川明男)

## 訂正とお詫び

遊絲 3号のP 4で斎藤慎一郎さんのお名前を「晋一郎」と表記してしまいました。訂正してお詫び致します。(新海 明)



## 原稿募集中

「遊糸」の原稿を募集中です。ちょっとした観察記事(短報)、会員に広く知ってもらいたい情報(総説)、採集記録、文献紹介、各地の同好会の催物情報、研究上の標本や資料募集の記事等等、なんでも構いません。こんなコーナーも作って欲しいという希望があれば、それもOKです。会員の皆様のご協力を是非お願いします。

投稿にあたってのお願い

1. 原稿はクモ形類・多足類に関する事ならなんでも構いません。
2. 字数制限はありませんが、あまりに長文の場合は削除や分割での掲載をお願いすることもあります。
3. 原稿はワープロ、手書き原稿、はがき、E-mailなどなんでも構いません。

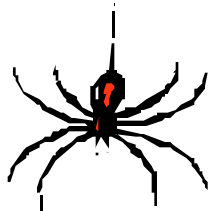
送付先

190-0022 立川市錦町3-12-16-1103

新海 明まで

E-mailではdp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp(谷川明男)まで

発行は、年2回(5月、11月)の予定。締切は発行月の前月末日です。



## 編集後記

原稿が集まらないと嘆いていたのが嘘のように、今回は早くから多くの原稿を寄せていただきました。ご投稿をいただいた方々にあらためて御礼申し上げます。4号の発行を迎えて、やっと勢いがついてきたような気がします。この勢いが未長く続くように編集子一同頑張りたいと考えていますので、会員の皆様のご協力も引き続き宜しくお願いします。

また、昨夏にいただいた寄付金が底をつきそうになった折りに、東京蜘蛛談話会の例会参加者から「遊絲宛て」にと再び御寄付をいただきました。記して御礼申し上げます。

(新海 明)

## 日本蜘蛛学会

入退会は

事務局

525-0055 草津市野路町 1916

立命館大学理工学部生物地球科学研究室

吉田 真

Tel 077-561-2660 (Fax 077-561-2661)

会費の問い合わせおよび住所変更は

会計幹事

576-0043 交野市松塚 7-9

金野 晋

Tel (Fax) 0720-91-6701

年会費 正会員 7000 円(学生は 5000 円)

郵便振替口座 00970-3-46745

---

遊絲 第4号

1999年5月25日発行

編集者 新海 明, 谷川明男, 池田博明

発行者 日本蜘蛛学会 会長 西川喜朗

---